

スポーツ指導に関わる法律の研究

田村 岳

2020年の東京オリンピック・パラリンピックの開催が目前に迫り、国民のスポーツに対する関心が高まっている。オリンピックの舞台で活躍する選手を増やすためには、高い指導力をもった「指導者」が求められる。しかし、ここで問題となるのが、指導中に怪我や事故が発生したときの対応である。本研究はスポーツにかかわる「指導者」にスポットを当て、スポーツ事故の分類や事故が発生したときの「指導者」の法的責任を研究した。また、スポーツの現場における危機管理体制の整備（リスクマネジメント）の重要性について、20名のスポーツ関係者にSNSやホームページを通じて研究への協力を依頼した。その結果、8名の方々にメールや直接訪問の方法によってインタビューを行った。

スポーツに怪我や事故は付き物であるが、実際に起きてしまったときに責任を問われる当事者は「指導者」である。責任には、刑事責任と損害賠償責任などを負う民事責任があり、いずれも指導者が個人として背負うには重いものである。そのため、怪我や事故が発生するリスクをいかに小さくしていくかが問題となる。リスクには、競技の指導計画に潜むリスク、選手が競技場所に来るまでの交通事故などのリスク、選手間でのトラブルといった人間関係上のリスク、練習施設の安全性といったリスクなど多岐にわたる。

スポーツそれ自体にリスクは内在するものだが、そこには「予防しなければならないリスク」と「予防することができないリスク」がある。野球を例にすると、投手が打者に打球を当ててしまうデッドボールを予防することはできない。しかし、ヘルメットをかぶることで、大事故に至るリスクは予防できる。つまり、スポーツにおけるリスク軽減方法であり、積極的な安全対策とは、指導者がスポーツにはリスクが伴うことを十分認識したうえで、過去の経験、知識などから危険を予見し、いかにすれば事故の発生を防げるか、事故の被害を小さくできるかを徹底的に分析し、具体的な策を取ることであるといえる。そして、指導者にとっては、安全に配慮してもなお発生しかねないリスクに備え、競技中のリスクの選手に対する事前説明や保険への加入、専属の顧問弁護士を雇うことなども必要となる。

私事となるが、筆者はこれまでの16年間という長い時間を野球とともに過ごしてきた。大学生からは学生コーチとなり、チームの先頭で「指導する」機会をいただき、経験を積んだ。野球からは挨拶、礼儀、作法などはもちろん、仲間の大切さや思いやりをもつことなど数多くのことを学び、学んだ成果は普段の生活でいかされてきた。

本研究を進めるうちに、大学での指導者としての指導は、単純に競技の技術を指導するだけではなく、選手の身体を任されることでもありと改めて認識した。幸いにも、4年間の指導のなかで大きな事故は起きなかったが、これからスポーツを指導する機会があれば、様々なリスクを考慮しつつ、本研究の成果と大学での指導の経験をいかしていきたいと思う。